

# 劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とが過剰適応に及ぼす影響について

平野里実\* 石井雄吉\*\*

本研究では、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とが過剰適応に与える影響、および、この3者の関連について検討した。

142名の大学生を対象として、対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井，2006）に含まれる①：「劣等恐怖」因子，自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下，2009）に含まれる②：「承認・賞賛過敏性」因子，③：過剰適応尺度（桑山，2003）の各項目，そして，緩衝項目から構成された全38項目を施行した。また，過剰適応尺度（桑山，2003）については， $\alpha$ 係数の算出とG-P分析とを行ってから因子分析も実施した。その後，①～③についてパス解析を行った。

因子分析の結果，過剰適応尺度において「自己不全感」「遵守性」「非自己主張性」「見捨てられ回避」「承認・賞賛欲求」の5因子が抽出された。

パス解析の結果，劣等恐怖と「自己不全感」のパス係数は.421，承認・賞賛過敏性と「自己不全感」のパス係数は.371であった（各 $p < .001$ ）。このことから，劣等恐怖と承認・賞賛過敏性は，自己不全感に影響を与えると考えられた。特に，劣等恐怖によって自己不全感が起こると推察された。

さらに，過剰適応は承認・賞賛過敏性との関連よりも，劣等恐怖との関連の方が強いことが明らかとなった。そのため，劣等恐怖は過剰適応の様々な側面に影響を及ぼすと考えられた。

因果関係に関しては，“劣等恐怖→自己不全感→過剰適応”や“劣等恐怖→非自己主張性→過剰適応”という関係が推察された。劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とが過剰適応に直接影響を与える場合もあるが，既述のように，自己不全感や非自己主張性を媒介として，過剰適応に影響を与えている可能性も考えられた。

キーワード：劣等恐怖，過剰適応，承認・賞賛過敏性

## 問題

### 過剰適応

適応には，個人が生きている社会的・文化的環境への適応を意味する「外的適応」，および，幸福感・満足感を体験するなどの心的状態の安定を意味する「内的適応」という2つの側面があり，この双方が統合された状態が適応であると言われている（益子，2008）。それに対し，過剰適応は，「外的適応が過剰なために，内的適応が困難に陥っている状態」と定義されている（桑山，2003）。

過剰適応に関する他の定義としては，「環境からの要求や期待に，個人が完全に近い形で従おうとすることであり，内的な欲求を無理に抑圧してでも，外的な

期待や要求に応える努力をすること（石津，2006）」、「他者の要求や期待に完全に近い状態で従おうとした結果，対人関係上の適応は良好となりながらも，内的適応が損なわれてしまった状態（益子，2008）」、「外的には良好な適応を示しているものの，内的には自己を抑制している状態（大西・西村，2012）」などが挙げられる。

このように定義される過剰適応は，現代日本社会において誰でも陥る可能性があり，特に問題をきたしていなくても同様の傾向を多かれ少なかれ多くの人が持っている身近な現象とも言われている（桑山，2003）。さらに，近年において，過剰適応状態にあると考えられる青少年が呈する急な不登校や心身症，非行などが問題視されており，過剰適応が様々な精神疾患に繋がる可能性も指摘されている（船津，2010）。

そう考えると，過剰適応に関する研究は，主に青年期にある者の不適応や生きづらさの軽減を支援する手がかりになるとともに，社会的に問題視されている不登校や精神疾患，非行などの低減に寄与すると期待さ

\* 明星大学大学院心理学研究科

\*\* 明星大学心理学部

<sup>1</sup> 本論文は明星大学心理学部2021年度卒業論文（未公開）に若干の加筆修正を加えたものである。

<sup>2</sup> 本研究にあたり，開示すべき利益相反関連事項はない。

れる。

さらに、過剰適応を引き起こす背景として、これまでも様々なことが言われてきた。例えば、「過剰適応の子どもは、すなわちよい子」と定義づけられ、過剰適応の特徴は交流分析のAdapted Child: AC（順応した子ども）と一致する（桑山, 2003）。過剰適応にある者は、否定的な自己概念を持ち自信がない一方で、他者からの承認を得て非承認を回避することによって、自信を獲得し、内的適応を維持しようとしている（益子, 2008）。過剰適応は他者から嘲笑される・嫌われるといった否定的な評価を回避し、他者からの拒否を避けたいという「拒否回避欲求」と直接的に関連がある（大西・岡村, 2012）。

この「承認を得て非承認を回避すること」や「拒否回避欲求」の定義は、次に示す劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とに似た意味合いであると考えられる。

### 劣等恐怖

次に、劣等恐怖についてみることにする。劣等恐怖とは、堀井（2006）によると、「自分より優れた他者の存在におびえ、自分が他者より劣ることにおびえた状態」を意味している。この劣等恐怖は、堀井（2006）が開発した、「おびえの心性に基づく対人恐怖心性」を測る尺度「対人恐怖心性尺度Ⅱ」に含まれる因子の1つである。ちなみに、「おびえの心性に基づく対人恐怖心性」とは「対人場面で自己の攻撃性が他者に向けられる、または、他者の攻撃性もしくは他者に投影された自己の攻撃性が自己に向けられることによって、自己の安全感が損なわれることへの恐怖の心理的傾向」と定義されている（堀井, 2006）。また、平野（2020）によると、青年期にある者は、対人恐怖心性の中でもこの劣等恐怖が高い傾向にある。

### 承認・賞賛過敏性

次に、承認・賞賛過敏性についてみることにする。承認・賞賛過敏性とは、上地・宮下（2009）によると、「他者からの承認や賞賛に過敏で、それが得られないと傷つく傾向」を意味している。この承認・賞賛過敏性は、彼ら（2009）が開発した「自己愛的脆弱性尺度短縮版」に含まれる因子の1つである。なお、ここで言う自己愛的脆弱性とは「自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること」と定義されている（上地・宮下, 2009）。

また、平野（2020）によると、自己愛的脆弱性は青

年期にある者で高い傾向にあり、その中でも特に承認・賞賛過敏性が高い傾向にある。

### 先行研究から導き出される仮説

既述のように、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とは、「非承認を回避する傾向」や「拒否回避欲求」と関連があると考えられる。したがって、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とはどちらも、過剰適応に直接的な影響を与えるのではないかと推測される。

### 目的

本研究では、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とが、過剰適応に与える影響の検討、および、この3つの因果関係モデルを「劣等恐怖、および、承認・賞賛過敏性が過剰適応に強く影響している」と仮定して、その関係性についての検討を行った。

### 方法

#### 調査対象者

対象者は、18歳から25歳の大学生男女142名（男性58名、女性84名、平均年齢20.58歳、SD=1.51）であった。なお、これらの対象者は、彼らの在籍する大学が運営するWEB上の学習管理システムに掲載された本研究への協力依頼に記された調査（Google Forms）のUniform Resource Locator: URLに自らがアクセスした大学生である。

#### 調査票（Google Formsの作成）

調査票はGoogle Formsを用いて、対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井, 2006）に含まれる「劣等恐怖」因子、自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下, 2009）に含まれる「承認・賞賛過敏性」各因子、そして、過剰適応尺度（桑山, 2003）の項目、さらに、ある種のpsychological artifactsを統制するための緩衝項目により作成した。

「劣等恐怖」因子は、「周りに自分より実力のある人がいて不安である」「他人が自分より優れていると不安になる」など、周りと比べて自分が劣ることへの不安を表す5項目から構成されている（堀井, 2006）。

「承認・賞賛過敏性」因子は、「自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたがない」「自分の良い所を褒められたり認められたりしないと、自分に自信が持てない」など、他人からの評価や反応への過敏性や傷つきやすさを表す5項目から構成されている（上地・宮下, 2009）。

「過剰適応尺度」は、対自因子と対他因子との2因

子から構成されており、対自因子は「間違っただけをしたり言ったりするのが恐くて、引っ込み思案になる」「自分が本当はどうしたいのか、よく分からないことがある」など、自分自身に対する自信のなさや周囲からの左右のされやすさなど、対自的側面の特徴を表す12項目から、対他因子は「周囲に迷惑をかけるようにいつも気を配っている」「自分がどうしたいかよりも、どうすべきかの方が先に思い浮かぶ」など、周囲によい印象を与えて是認される存在になろうとする他者志向的な態度など、対他側面の特徴を表す10項目からそれぞれ構成されている(桑山, 2003)。

緩衝項目は、「夜はよく眠れている」「普段から健康に気を遣っている」「期限はきちんと守る方である」「人に何かしてもらったら、感謝の気持ちを伝えるようにしている」「自分は怒りやすい方だと感じる」「食欲は普通にある」の6項目を独自に作成し、質問項目の中にランダムに挿入した。

以上の全38項目について、5件法(5=大変によく当てはまる, 4=よく当てはまる, 3=どちらでもない, 2=あまり当てはまらない, 1=まったく当てはまらない)により回答を求めた。

### 倫理的配慮

調査対象者への倫理的配慮として、「①収集したデータや個人情報は本研究でのみ使用し、当該研究の目的以外に無断で二次利用されないこと、②調査は匿名で行うため、研究発表において個人情報の漏洩は生じないこと、③本研究への協力は任意であり、学習管理システムにGoogle FormsのURLを掲出する授業の成績とは一切関係ないこと他」を説明した。

### 結果の処理方法

過剰適応尺度については、 $\alpha$ 係数の算出およびG-P分析によって項目分析(精選)を行った。G-P分析は、全対象者の同尺度平均点の $\pm 1SD$ 以上・以下を基準として高群と低群とを抽出し、その両群間で各項目の平均点を $t$ 検定により比較した。さらに、この手続きにより精選された項目群を対象にして、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

なお、過剰適応に関する研究においては、桑山(2003)の過剰適応尺度、または、石津(2006)の青年期前期用過剰適応尺度が比較的良好に用いられているが、研究には石津(2006)による尺度の方がよく使用されている印象を受ける。しかし、本研究の場合、桑山(2003)の過剰適応に対する定義の方が適している

と考えられるため、桑山(2003)の過剰適応尺度を使用した。

ただし、この過剰適応尺度は、他の尺度との関連や尺度内容に関してさらなる検討の必要性が示唆されている(桑山, 2003)、抽出された因子も2個と少なく、過剰適応を捉えきれていない可能性も窺われる。そのため、本研究では改めて因子分析による尺度内容の検討を行った。

過剰適応尺度項目のG-P分析・ $\alpha$ 係数の算出、そして因子分析の後、劣等恐怖、承認・賞賛過敏性、過剰適応尺度の3者についての記述統計量(平均と標準偏差)を算出し、回答者全体の傾向を把握し、その後、パス解析によって、3つの因果関係の検討を行った。

## 結果

### 項目分析

まず、過剰適応尺度全項目で、項目分析( $\alpha$ 係数算出・G-P分析)を行った結果、 $\alpha$ 係数は全項目で.86以上、尺度全体で.87と高く、G-P分析においても高群低群間で全項目の平均点に有意差を認めた。したがって、全項目で因子分析を行うこととした。

### 因子分析

桑山(2003)を踏まえて因子数を2個に固定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、同じような2因子は抽出されなかった上に、累積寄与率が.41と若干低かったため、異なる因子数を設定した因子分析を数回行った。その結果、解釈の妥当性から、2因子以外では4因子か6因子が妥当であると判断した。

4因子に固定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果は、累積寄与率は.50と高くなった。しかし、因子ごとに項目数にかなりばらつきが出てしまったため、4因子も妥当ではないと判断した。

以上のように因子数の検討をした結果、6因子での固定に落ち着いた。6因子に固定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、累積寄与率が.54となった。項目数が1個の因子を排除し、最終的に5因子となったものの、因子負荷量も全て.45以上と落ち着いたため、5因子が妥当と判断した。その結果をTable 1に示した。

$\alpha$ 係数は、全体では.87、「自己不全感」で.82「遵守性」で.58「非自己主張性」で.77「見捨てられ回避」で.67「承認・賞賛欲求」で.46となった。

Table 1. 過剰適応尺度の因子分解結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
自己不全感 $\alpha = .82$					
不当な要求をされたとき、「嫌です」と断れない	.85	.16	-.12	-.23	.06
自分の言ったことやしたことに自信がない	.71	-.28	.15	-.02	.08
間違っことをしたり言ったりするのが恐くて、引っ込み思案になる	.62	.08	-.03	.14	-.12
周りの人たちの評価が気になって、自分のしたいよう行動できない	.59	.07	-.03	.21	.21
他人の反対にあうと自分の意見を変えてしまう	.46	.12	.27	-.02	-.09
遵守性 $\alpha = .58$					
自分がどう感じているかに関係なく、目上の人の言うことはきく	.19	.56	-.13	.06	-.09
目上の人に指図されて何かをする時でも、反発を感じることはほとんどない	-.06	.56	.01	.08	.01
自分がどうしたいかよりも、どうすべきかの方が先に思い浮かぶ	.05	.49	.09	-.04	.01
非自己主張性 $\alpha = .77$					
自分がどうしたいのかということは、いつでもはっきりしている*	.00	-.03	.92	-.17	.10
いつも自分の考えや意見を持っている*	-.08	.12	.84	.10	.03
自分が本当にどうしたいのか、よく分からないことがある	.09	-.06	.48	.11	-.13
見捨てられ回避 $\alpha = .67$					
他人とのどんなトラブルも避けるように、いつも気を配っている	-.05	.08	.01	.92	-.09
周囲に迷惑をかけないようにいつも気を配っている	-.02	-.01	-.05	.53	.30
承認・賞賛欲求 $\alpha = .46$					
親や先生の期待にはできるだけ応えるように努力する	-.20	.46	.02	-.08	.59
いつも褒められたいと思っている	.10	-.08	-.04	-.01	.51
	累積寄与率	.54			
	$\alpha$ 係数	.87			

\*は逆転項目

## 記述統計量

全対象者の劣等恐怖と承認・賞賛過敏性と過剰適応尺度各因子の平均値と標準偏差をそれぞれ求めた (Table 2)。劣等恐怖および承認・賞賛過敏性の最高点は25点であり、過剰適応尺度の最高点は、「自己不全感」で25点、「遵守性」と「非自己主張性」で15点、「見捨てられ回避」と「承認・賞賛欲求」で10点であった。

Table 2. 記述統計量

	平均値 / 最高点	標準偏差
劣等恐怖	17.49 / 25	4.71
承認・賞賛過敏性	17.67 / 25	4.45
過剰適応尺度		
自己不全感	15.49 / 25	4.76
遵守性	10.56 / 15	2.56
非自己主張性	8.93 / 15	3.02
見捨てられ回避	7.81 / 10	1.85
承認・賞賛欲求	7.58 / 10	1.78

## パス解析

劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とが、過剰適応に与える影響および関連を検討するため、劣等恐怖および承認・賞賛過敏性を独立変数、過剰適応の5因子を従属変数に設定したパス解析を行った (Figure 1, 2)。その結果、有意でないパスが見られた上に、モデル適合度や自由度が算出されなかったため、それらのパスを削除して再度解析を行った。その結果を Figure 3 に示した。

Figure 3 をみると、モデルの適合度は、GFI=.992, AGFI=.944, CFI=.996, RMSEA=.045 となり、各指標ともに十分なあてはまりを示した。

劣等恐怖は、「自己不全感」「非自己主張性」「見捨てられ回避」の3つと0.1%水準で有意であった。劣等恐怖と「自己不全感」とのパス係数は.421、劣等恐怖と「非自己主張性」とのパス係数は.516、劣等恐怖と「見捨てられ回避」とのパス係数は.443であった。

承認・賞賛過敏性は、「自己不全感」「承認・賞賛欲求」の2つと0.1%水準で有意であった。承認・賞賛

Figure 1. パス解析の結果 (劣等恐怖とのパス図)

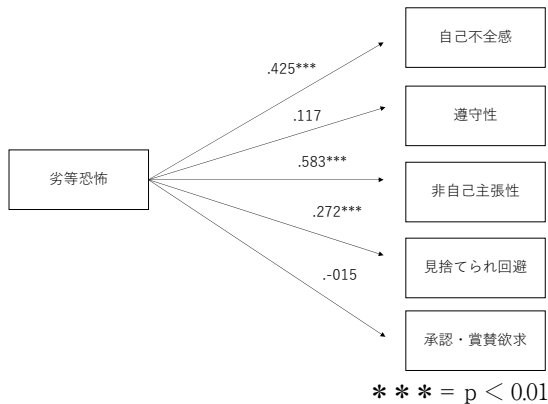


Figure 2. パス解析の結果 (承認・賞賛過敏性とのパス図)

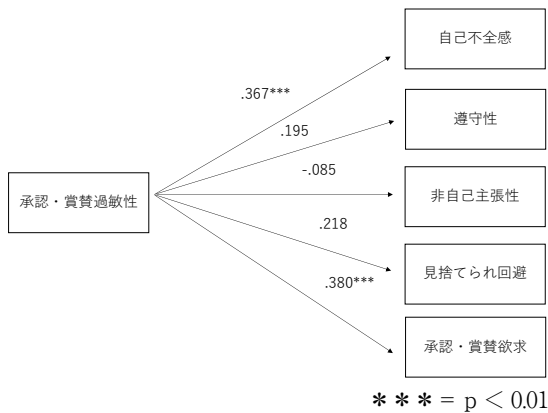
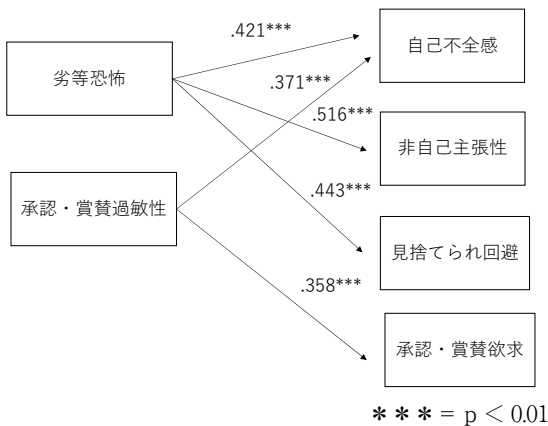


Figure 3. 有意でないパスを除いたパス解析の結果



過敏性と「自己不全感」とのパス係数は.371, 承認・賞賛過敏性と「承認・賞賛欲求」とのパス係数は.358であった。

### 考察

#### 過剰適応尺度の因子分析結果について

既述のように、最終的に桑山 (2003) とは異なる 5 因子が抽出された (Table 1)。

因子 1 の 5 項目は、外的適応が過剰なために、自分のしたいことが出来なかつたり、自分自身を抑えたりといった状態を示している。そこで「自己不全感」と命名した。

因子 2 の 3 項目は、他者 (特に目上の人など評価をされる立場) に対して、自分の要望や気持ちを抑え、従うという状態を示している。そこで「遵守性」と命名した。

因子 3 の 3 項目は、自分の考えや意見を自覚していないもしくは主張できない状態を示している。そこで「非自己主張性」と命名した。

因子 4 の 2 項目は、他者とのトラブルや指摘・批判を避ける傾向を示している。そこで「見捨てられ回避」と命名した。

因子 5 の 2 項目は、他者に合わせることで、承認や賞賛を得ようとする状態を示している。そこで「承認・賞賛欲求」と命名した。

以上の結果から、「自己不全感」5 項目、「遵守性」・「非自己主張性」3 項目、「見捨てられ回避」・「承認・賞賛欲求」2 項目から構成される改訂版過剰適応尺度が完成した。

#### 全対象者の結果から

劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とは、どちらも同じくらいの平均値・標準偏差を示した (Table 2)。したがって、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性において傾向に差はないといえる。また、どちらの平均値も17点と半分以上であり、全体的に高い傾向が窺える。これは、平野 (2020) の結果と同様であり、青年期にある者は、自分が他者より劣っていると感ずることへの恐怖を抱き、他者からの承認や賞賛に過敏であると推察される。

改訂版過剰適応尺度では、全因子の平均値が総得点の半分以上を示した。つまり、青年期にある者は、過剰適応の傾向が比較的高く、特に「自己不全感」「遵守性」「見捨てられ回避」「承認・賞賛欲求」の4つが、過剰適応の主要な要素であると推察される。

## 劣等恐怖および承認・賞賛過敏性と過剰適応との関連や影響

### 1) 劣等恐怖および承認・賞賛過敏性と自己不全感との関連

Figure 3をみると、過剰適応のうち「自己不全感」は、唯一、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性のどちらとも関連が示された。つまり、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とは、自己不全感に影響を与えていることを示している。

益子(2009)によると、自己不全感は過剰適応の不応性を決定する因子となり得ると推察されている。本研究においても、自己不全感は、劣等恐怖と承認・賞賛過敏性とのどちらとも関連が示されたため、過剰適応を検討する上で重要な因子・要素であることが窺われた。

森川・茅野(2019)によると、自己不全感は、他者に気を遣うというよりも、自分に自信がなくなり、自分の良くないところばかり気になり始めることに起因する。したがって、本研究においても、自分が劣っているのではと感じる劣等恐怖によって、自己不全感が起こるといった結果になったのではないかと考えられる。

また、益子(2009)は、対人恐怖心性と自己不全感との間にやや強い正の相関があると指摘していることから、本研究でも、同じように、劣等恐怖(対人恐怖心性)と自己不全感(過剰適応)との関連が示されたのではないかと考えられる。

### 2) 劣等恐怖および承認・賞賛過敏性が過剰適応に与える影響・関連性

益子(2009)によると、過剰適応にある者は、対人場面での自己の醜態を恥じるというような対人恐怖心性傾向が高く、そのような自分を人に見られたり知られたりしないように過剰適応をしている可能性があると考えられる。本研究における劣等恐怖は「自分が他者より劣っていることへの恐怖」を表しており、既述のような自己の醜態を恥じる傾向とも関連すると考えられる。そのような恐怖を感じている自分を人に見られたり知られたりしないようにするため、自己主張を避けることで過剰適応に陥るのではないかと推察される。

また、石井・萩田・善明(2017)によると、過剰適応にある者は、他者からの賞賛を獲得するよりも、「嫌われたくない」など、他者からの否定的評価や拒絶の回避を重視する傾向がある。他者からの否定的評価や

拒絶の回避というのは、まさに劣等恐怖や承認・賞賛過敏性の特徴を示していると考えられる。したがって、本研究のパス解析の結果のように、劣等恐怖および承認・賞賛過敏性は過剰適応と関連があると言える。

本研究では、Figure 3をみると、承認・賞賛過敏性と過剰適応との関連よりも、劣等恐怖と過剰適応との関連の方が強いことが示された。また、両者の関連を示す数値が高いだけでなく、劣等恐怖は過剰適応の複数の要素と関連がみられる。したがって、過剰適応は劣等恐怖との関連が特に強く、劣等恐怖によって様々な側面に影響を受けると推察される。

このように、自分が他者より劣っていることへの恐怖から、自分に自信がなくなることで自己不全感が起こり、最終的に過剰適応に至るのではないかと(劣等恐怖→自己不全感→過剰適応)と示唆される。

また、自分が劣っているという恐怖や否定的評価を避けるために、自己主張をしないなどのように外的適応を高め、最終的に過剰適応に至る(劣等恐怖→非自己主張性→過剰適応)のではないかと考えられる。

これらのことから、劣等恐怖および承認・賞賛過敏性が過剰適応に直接影響を与える場合もあるが、自己不全感や非自己主張性を媒介として、過剰適応に影響を与えている可能性も示唆される。

## 今後の課題

本研究では、劣等恐怖および承認・賞賛過敏性と遵守性とのパス係数が.117, .195と、他のパス係数よりも低い結果となった。

その理由として、尺度の項目内容の偏りが考えられる。本研究で使用した過剰適応尺度において、遵守性にかかわる項目内容は、相手を親や先生など目上の人限定したものが多かった。他の項目内容では、周囲や他人といった表現を用いているにもかかわらず、遵守性にかかわる項目は、目上の人に限定されている。つまり、尺度の項目内容に偏りがあるため、明確な関係を示さなかったのではないかと推察される。このことを改善するために、尺度内容の吟味、尺度の選定、新たな尺度の作成などを行っていく必要がある。

さらに、本研究の改善点として、上記のような尺度内容の吟味とともに、男女での比較が挙げられる。森川・茅野(2019)によると、女性は男性よりも人の目を気にして自分をよく見せたかったり、人からよく思われたいと思う傾向にあり、女性は男性よりも関係性を重視していると推察されている。したがって、本研

究でも男女での比較を行うことも有益であると考えられる。

また、石津・安保（2008）によると、過剰適応は非適応的でも適応的でもあるので、過剰適応の適応的、いわゆるポジティブな面に対しても注目がされており、また、過剰適応は、個人の性格特性からなる内的側面と、他者志向的で適応方略とみなせる外的側面で構成されているという。その内的側面は適応感やストレス反応にネガティブな影響を与えるが、外的側面は適応感を支え、ストレス反応にもポジティブな影響を与えると考えられている（石津・安保，2008）。

福光・河村（2009）は、過剰適応にある者は、自ら他者と積極的に関わることは少ないが、配慮のスキルを用いて集団には適応していると述べている。また、逆に、過剰適応には配慮や共感といった向社会的スキルの高さがあり、それらを発揮していることで適応的にみえる人々の中にも、内的葛藤を抱えて苦しむ人々がいるとも示されており（白倉・堀・濱口，2012）、非適応的な面と適応的な面の両方を持つことが示されてきている。

そうなると、過剰適応は非適応的な面（外的適応が過剰であることで内的適応が損なわれる、内的葛藤が起こるなど）だけではなく、それは偽りの自己（Winnicott, 1965 牛島, 1977）的な「社交術」としての適応的な機能も兼ね備えていると言える。そのため、本研究のような過剰適応の非適応的な面への注目だけではなく、適応的な面へ注目した研究も意義があると考えられる。過剰適応を肯定的に考え、受け止められるような支援を模索することも必要であろう。

## 利益相反について

本論文に関し、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

- 平野里実（2020）. 対人恐怖心性と自己愛的脆弱性の関連について—おびえの心性に着目して— 明星大学心理学部心理学科石井ゼミ 2020 年度ゼミ論文（未公開）
- 堀井俊章（2006）. 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発—対人関係におけるおびえの心性を測定する試み— 学生相談研究, 26, 221-232.
- 福光奈緒子・河村茂雄（2009）. 女子中学生における過剰適応とソーシャル・スキルの関連についての検討 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 205.
- 船津 愛（2010）. 青年期過剰適応に関する一考察—尺度の再検討とストレスコーピングとの関連— 日本青年心理学会大会発表論文集, 18, 30-33.
- 石津憲一郎（2006）. 過剰適応尺度作成の試み. 日本カウンセリング学会第 39 回大会発表論文集, 137.
- 石津憲一郎・安保英男（2008）. 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石井麻美子・萩田純久・善明宜夫（2017）. 中学生・高校生を対象とした過剰適応に関する研究：承認欲求をストレス反応の関係から 教職教育研究センター紀要, 22, 101-110.
- 上地雄一郎・宮下一博（2009）. 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 桑山久仁子（2003）. 外界への過剰適応に関する一考察：欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.
- 益子洋人（2008）. 青年期の対人関係における過剰適応傾向と、性格特性、見捨てられ不安、承認欲求との関連 カウンセリング研究, 41, 151-160.
- 益子洋人（2009）. 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、不登校傾向との関連—高等学校 2 校の調査から— 学校メンタルヘルス, 12, 69-76.
- 森川知美・茅野理恵（2019）. 関係性攻撃の被害経験に対する認知と過剰適応傾向との関連 信州心理臨床紀要, 18, 41-50.
- 大西裕子・岡村寿代（2012）. 自己志向的完全主義・拒否回避欲求と過剰適応の関連：青年期後期を対象として 発達心理臨床研究, 18, 33-41.
- 白倉 瞳・堀 正士・濱口佳和（2012）. 大学生におけるソーシャル・スキルと過剰適応傾向との関連 筑波大学発達臨床心理学研究, 23, 1-8.
- Winnicott, D. W. (1965). The maturational Processes and the Facilitating Environment; Studies in the Theory of Emotional Development, The Hogarth Press Ltd. (ウイニコット, D. W. 牛島定信 (訳) (1977). 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)

## 付記

本研究にあたり、統計指導でお世話になりました古谷大樹実習指導員（明星大学心理学部）、質問紙調査実施にご協力頂きました小林一岳教授（明星大学教育学部）に深謝申し上げます。



## *The Influence of Inferiority Fear and Approval / Praise Sensitivity on Over-adaptation*

*SATOMI HIRANO (GRADUATE SCHOOL OF PSYCHOLOGY, MEISEI UNIVERSITY)*

*TAKAYOSHI ISHII (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, MEISEI UNIVERSITY)*

*MEISEI UNIVERSITY THE BULLETIN OF PSYCHOLOGICAL STUDIES, 2023, 41, 31—39*

Key Words : inferiority fear, over-adaptation, approval/praise sensitivity